

エッセイ

「最首悟旧蔵資料」寄贈経緯

丹波 博紀

最首塾世話人、大正大学専任講師

2025年5月、井上ゆかりさんから最首悟さんに本誌への寄稿依頼があった。最首さんはすぐに了解されたが、体調のこともあり、あらたに原稿を書くことを控えざるをえなかった。そこで、私の方から最首さんに、最首さんがかつて『季刊 水俣支援 東京ニュース』に寄せた原田正純さんの追悼文を再掲することを提案し、最首さんもこれに頷かれた。また、最首さんと原田正純さん、石牟礼道子さんが一緒に写っている写真を水俣フォーラムからお借りし、併せて掲載していただくことにした。こちらは「水俣フォーラム評議会」（開催日：2004年10月3日、会場：日本都市センター）のときのものである。原稿転載を快諾くださった久保田好生さん、写真を提供してくださった水俣フォーラムにお礼申し上げます。以上のような経緯があり、私の方で最首さんの不知火海漁業関連資料の寄贈経緯とその後の感想について書き記しておくことにした。

水俣学研究センターに収められる「最首悟旧蔵資料」とは、「最首悟さんが不知火海総合学術調査団に参加し、不知火海漁業の変遷を研究した資料群」のことを指す。最首さんは1977年より水俣に通い始め、そこで多くの資料を収集し、東大の研究室にもちこんだ。私が世話人を務める「最首塾」の前身「不知火グループ」は、そうしてやってきた資料を整理するために、佐藤真さん（当時・東大学生）たちが1980年に始めたものだった。最首さんは退官後、恵泉女学園大学や和光大学などで教えられ、森千代喜さんの日記などはいつとき和光大に運ばれていたが、基本は自宅の書庫で保管されていた。本人からは、資料を少しずつ相思社に送っているとも聞いていた。

最首塾と私のことを少し記しておく。先の不知火グループは1994年3月、最首さんの東大退官と併せて終了した。そこで同年10月に有志が最首塾を新たに始めたのだった。私は1999年4月から最首塾に通い始め、2005年10月の定例会から世話人を務めている。2004年8・9月、私は最首さんに連れられてはじめて水俣に行き、以来通い続けている。最首さんとは沖縄や福島も一緒に旅した。

さて、2012年2月8日～10日、井上ゆかりさんが横浜にある最首さんの自宅を訪ねられ、9日に不知火海漁業関連の資料をセンターに寄贈することが決まった。9日に決まったのは、8日に井上さんが寄贈をお願いされ、その結論が翌日に持ち越されたからだった。以下、そのときのことを書いておく。

井上さんと最首さんとのかわりかは、2011年12月8日に最首さんが水俣学講義（講義名：

水俣病といのち)に招かれたときに始まったと思う。この講義のことは、今回掲載する原田正純さん追悼文に少し出てくる。そのときか、その後かに、井上さんは最首さんの自宅を訪問し、資料を見ることを依頼していた。井上さん来訪前の私と最首さんとのメールのやりとりを確認すると、私は「井上さんは寄贈を希望されているのだろう」といったことを書いており、井上さんの思いは来訪前からすでに感じていた。

8日、井上さんから寄贈の依頼があったが、すぐには決まらなかった。井上さんの申し出に対して、最首さんは「丹波が『よい』と言ったらよい」と答えられたからだった。最首さんは以前からこの資料を私に譲るようなことを言っており、私もまんざらではなかった。私からすると、「不知火グループ」にかかわる資料は、東京に置いておきたい気持ちがあった。だが、個人で相続・管理できるような代物ではないことは、さすがの私にもわかっていた。あとはどんなかたちで私が納得するかで、上の最首さんの言葉も、私を気づかい、快く納得できるようにするためのものだったと思う。私はその場での返答を避け、最首さんの自宅を出たあと、横浜駅近辺で井上さんと夕食を取りながら、自分の考えや気持ちを強く伝えた。それに対して井上さんは真剣かつ真摯に応答され、私はそれに心打たれ、気持ちが定まり、「寄贈する」と回答したのだと思う。その結果を9日、最首さんに伝え、その日に搬出作業が始まったのではないか。

以上が寄贈の経緯だが、いま私は最首資料が水俣学研究センターに寄贈されて本当によかったと考えている。最首さんは大きな荷物を1つ降ろせた様子で、その後はもう1つおもちの資料、東大時代の資料の処理を考えるようになった。私も水俣学研究センターへの寄贈を機に、資料の公共性の意味をよく考えるようになり、東大時代の資料の寄贈先を探すようになった。この資料は2017年7月、川本隆史さん、吉見俊哉さんのお力添え、尽力のもと、東大文書館に寄贈されることになった。こうして最首さんが大切に保管してきた2つの資料群がしかるべき場所でアーカイブされ、すでに重要な一次資料として利活用され始めている。このことが最首さんにとって、どれだけ安堵することかは想像にかたくない。

こうした道筋を拓いてくださった井上ゆかりさんと水俣学研究センターのスタッフ各位に心から感謝している。そのことをお伝えしたい。

2026年3月2日追記：

最首悟さんが今年2月8日に逝去された。89歳だった。本稿の初校をセンターに戻して間もなくのことだった。逝去を受けて、文章に手を加えることも考えたが、最首さんとの思い出を記した、そのときの気持ち・考えをそのまま残したいと考え、変更は控えた。

また、本号に掲載される最首さんによる原田正純さん追悼文についても、逝去を受けての変更は加えていない。